皮は 28~29 分を要し、その後 55~115 分を経て脱殻を喰い始め 46~125 分を要して全脱殻を喰い終つた。脱皮直後は幼虫は白色透明であり 10 時間以上を要して元の体色にもどる。又脱皮時再生がみられる、羽化については脱皮後成虫の形を整えるまでに 8 月では 43 分、10 月には 85 分を要した。(京都府医科大学・医動物)

家住性ゴキブリとその分布

朝比奈 正二郎

Asahina, S.: Domesticated cockroaches
and their distribution

ゴキブリ類は石炭期の頃から地上に現れていた昆虫で、現在世界で 4000 種以上記載されているが、我が国の旧版図から 76 種、現版図からは 28 種知られている。これには訂正を要するものがあり、増減の結果恐らく邦産種は 30 位になるであろう。周知の様にゴキブリ類には、その土着種以外に人家内に住み込んで、衛生害虫として扱われるものが相当数あり、世界的に分布のひろく有名なものは、チャバネゴキブリ (*Blattella germanica*)、トウヨウゴキブリ (*Blatta orientalis*)、ワモンゴキブリ (*Periplaneta americana*)、コワモンゴキブリ (*P. australasiae*)、オガサワラゴキブリ (*Pycnoscelus surinamensis*)、その他若干種がある。邦産家住性種としては、上記 5 種の外に、イエゴキブリ (*Neostylopyga rhombifolia*)、クロゴキブリ (*Perip. fuliginosa*)、ヤマトゴキブリ (*P. japonica*) 及び“ゴキブリ” (*Blatta coenocinna*) が知られている。このうちチャバネ、ワモン、コワモン、オガサワラ、イエゴキブリの 5 種は明らかに外来種とすべきもので、チャバネを除いて他は暖地のみに見付かっている。“ゴキブリ”並びにトウヨウゴキブリは、筆者の知る限り、まだ本邦内に定着したかどうか頗る疑わしい。クロゴキブリは“*picea*”の名で知られた東京以南に普通の害虫であるが、恐らく北米の *fuliginosa* であることに誤りがなく、真の日本固有の家住性ゴキブリとしてはヤマトゴキブリ 1 種のみで、東北から佐渡、本州中部に分布し、明らかに屋外で越冬し得る様に思われる。上記の世界共通種について、その原産地を推定するためには、正確な採集の記録と共に、過去の貿易、奴隷の運搬、戦争等の歴史的事実及び現今の分類分布学的知見をもとにして考えてみると、決してそれぞれの種名につけられた土地よりのものでなく、大部分は熱帯アフリカ、少数のものが東洋地方から拡つたものと推定される。これらの家住性ゴキブリは、我が国では、洋式住宅、ビルディング、その他暖房施設の増加に伴って分布範囲をひろげ、重要な家庭害虫の 1 となり、

殺虫剤抵抗性の系統を生ずる可能性も予想され、更に外航船舶の検疫の問題にもとり上げられようとして来ている現状にある。我が国におけるこの類の研究は、種の分類・分布の点すら頗る不十分で、更に詳細な生活史、実用に適する形態的区別法も速に確立されなければならず、今後衛生昆虫学関係者の一層の留意と関心とを喚起したいと思う。(予防衛生研究所・衛生昆虫)

岡山縣の蚋駆除について

大野 勇 茂木 博林

Ohno, I. and Mogi, H.: On the control
of the gnat in Okayama Pre.

殺虫剤に依る害虫駆除研究の一環として昭和 29 年 9 月下旬に大阪市立医科大学医動物教室及び津山保健所の指導を得て岡山県物見部落一帯の山間部に於て蚋の生態調査及び DDT ベースト、DDT 水和剤、DDT-リンデン混合乳剤に依る蚋の幼虫駆除の試験を行つた。生態調査の結果溪流の水辺雑草特に俗称おおばすげの葉に多数蚋の卵、幼虫、蛹が附着しており溪流中の岩石に附着する事は少く其の種類は「につぼんあしまだらぶゆ」であつた。

蚋幼虫の駆除方法としては薬剤を溪流の水量に対し 0.6, 1.0, 1.2 ppm になる如く放流し放流点より 3 m, 20 m, 50 m, 100 m, 200 m, 500 m, 1000 m の地点に於て時間毎に幼虫の流失する数を観測記録した。其の結果上記三薬剤はいづれも効果が認められ、薬剤の有効範囲は DDT-リンデン混合乳剤では 1000 m 以上に達する事がわかつた。又薬剤の同一濃度に於ては DDT-リンデン混合乳剤が最も効力が強い事が認められた。結論としては充分な指導を行えば薬剤による蚋の駆除は非常な効果があると認められた。(旭ガラス K.K.)

数種のブユ蛹の剛毛について

徳 本 洋

Tokumoto, H.: On the setae and the
processes of some black fly pupae

Prosimulium hirtipes, *Simulium* (*Eusimulium*) *latipes*, *Simulium* (*Odagmia*) *oitanum*, *Simulium* (*Simulium*) *japonicum* の蛹の各種棘毛の形態、分布等についてそれぞれの種を比較しながら述べた。種名の中には種々論議のあるものもあるが、同定していたゞいた正垣幸男氏によつた。尚各種棘毛に関する呼称は全て仮称であつて、適正を欠くものも多いと思われるので御批判御教示を